



NPO通信



東昭先生への感謝



かわさき市民アカデミー開設以来、「科学」のコーディネーターを担当してこられた東先生が引退なされます。東先生はNPOの理事長としてNPOの基礎固めにも多大な貢献をなさいました。長い間アカデミーを支えていただき有難う御座いました。



アカデミーと共に歩んで

東昭

かわさき市民アカデミーに、その創設以来関係を持たせていただき、早20年近くにもなりました。理工関係という狭い領域に閉じ籠もっていた私にとって、いろいろな領域の専門家の集まる初期の運営委員会は、目を見張るような楽しいものでした。各先生方から勿体無いような素晴らしい御話を伺って、随分と勉強させて頂きました。

時には中学校時代の同級生も含めて、私と殆ど同年代の勉強熱心な受講生の方々に対して、果して自信を持って御話出来るかしらと云う心配と、時には私自身の専門とは少し外れた事柄にも言及せざるを得ない不安とが、常に付き纏っていました。でも受講生の皆さんは大変暖かく受入れて下さって、講義は楽しく生き甲斐のあるものになりました。

ある事柄について、受講生の中に私よりその道の専門家がいらっしゃって、助けて頂いたこともありました。また多くの知人の専門家に講師になって頂き、私自身も受講生となって名講義を拝聴したことも数多くありました。長い御付き合いになって、何でも御話出来る私の大切な終生の友人となって下さっている方々も沢山いらっしゃいます。有難いことです。

講師として熱心に私の援助をして下さった知人の方々、賢明に御指導下さった歴代の学長を始めカリキュラム企画・編成委員会の皆様方、滅私の御手伝いをして下さった世話人の方々、そして力強くアカデミーを支えて下さっている事務局の方々に深い感謝の意を捧げます。

今後は書き続けて来た著作の完成に努めて参りたいと思っております。



東昭先生

かわさき市民アカデミー学長 和田 あき子

東先生が参加を決意して下さらなかつたら、かわさき市民アカデミーに自然科学系の講座を根づかせることはできなかったでしょう。開設当時、市民の学びの場は人文科学系というのが相場でした。したがって2年目に「科学」の講座とゼミ（ワークショップ）を開設したとき、応募者は数人という有様でした。先生は驚かれ、衝撃を受けられたにちがいません。しかし、市民が自然科学を楽しく学ぶ場としての講座づくりに努力を重ねられ、広い人脈を生かしていろいろな分野の専門家の講義を組織してくださいました。やが

て科学講座は、理系・技術系の受講生を集める人気講座となりました。アカデミーを育ててくださった先生の献身は、言葉が見つからないほど大きなものでした。

先生とは20年間ご一緒しましたが、私の記憶では、先生が会議を休まれたことはありませんでした。それもほとんど発言されることはなく、終わると登山帽をかぶり、リュックを背負ってお帰りになりました。そのお姿は、テレビで拝見した「トンボ少年」のイメージと重なって、私にはとてもほほえましく感じられました。ところが、数回先生が発言されたことがあり、それを聞いて私の先生への尊敬の念は一気に深まりました。それはアカデミーの在り方に対する実的確な、やむにやまれぬ批判でしたが、この事業に対する真摯な姿勢と愛情に溢れていました。

先生には折にふれ教えていただき、励ましていただきました。

長い間ほんとうにありがとうございました。

NHK特集 <トンボになりたかった少年>

1984.12.9

総合テレビ放送



樽林 昌治

東昭少年とトンボの出会いからの放映が有りましたが、実は先生の考えていた**タイトル**は「**トンボの科学**」だったそうですね。先生の飛翔の原点「**空を飛びたい**」トンボ（特にオニヤンマ）やツバメの様に自由に空を飛ぶ姿に憧れていた先生の関心の強さ（昆虫の採取、撮影等々）を感受しての題名の変更になったのかと、先生には大変失礼ですが、探究心の強さと、優しい人柄の表れたほほえましい逸話ですね。

かわさき市民アカデミー創立から、理事長、コーディネイターなど現在に至るまでの先生のご活躍を先輩諸氏（理事、世話人、事務局他）から伺い大変感服し、受講生の一人として心より敬服致します。受講生全員、私と同じ気持ちだと思います。

私たち受講生とアカデミー（暮らしの中の科学）東昭先生との出会いを思い起こすと、日本だけに非ず世界的にも高名な航空力学、流体力学の先生から直接受講できた事を僥倖と感謝し、我が人生の中の**大きな思い出**になりました。航空力学・流体力学・航空工学・ヘリコプター・ロケット他・・・更に生物力学の分野でも幾多の理論を発表され、航空力学～生物力学の世界的権威であると確信します。

トンボから始まり各種多岐にわたる昆虫・鳥・爬虫類・他の飛翔から海・川の中へ、飛び魚をはじめ、水中魚の遊泳力学、植物の種の飛翔のなかで翼果の講義の中で行った、アルソミトラ・マクロカルパの実験を思い起こしています。重心の位置は自然界の神業ですね。「生き物の形の美・動きの妙」を最後に有難う御座いました。

アカデミーでの講義も先生の、お気遣いで非常に分かり易くご講義いただき、時にはちょっと難しい、名前、数値、記号、グラフ等々有りましたが何とか理解出来ました。カレント、トピックスも多彩に有り、屋外講習、見学も数多く、楽しい講習でした。静岡県の浜岡原発見学時の（株）中部電力の社長のお出迎えが有りました。羽田空港見学の際も多数の幹部職員の出迎えが有り、更に新管制センター（塔）見学でも特別なトンネルを通り交信中の管制官の部屋の1階下からの羽田空港全域の眺望（管制官とはほぼ同じ目線）ができました。参加者全員、大感動でした。機会が有れば再度行きたいとの声が多くありました。見学訪問先の皆さんの出迎え、対応等見る限り、東先生の偉大さをひしひしと感じます。

2011年前期若者（大学院学生）の受講が有りました。受講の理由を聞いたところ、「東昭先生の**ファンです。**」とのこと。どちらから来たの」と聞いたところ、「某広報誌で、かわさき市民アカデミーで講習中と知り早速来ました。」とのこと。「大学は」某大学大学院（慶応大学大学院研究クラブ所属）で無人ヘリコプターの研究、実習等を実施中と聞き、東先生との面識は無いと聞き短時間ですが先生に紹介した所、東先生の発刊した本の内容の話をお二人共々嬉しそうに、話していました。私も嬉しかったです。学生さんも良い記念に成ったと思います。

まだまだお話は有りますが、創立時からの長年のアカデミーへの功績を考え、東昭先生は**かわさき市民アカデミー、受講生の宝だ**と思います。



東先生のすごさ

日高 賢一



私が東先生の講座を聴くようになって4, 5年だと思えます。何となく乗り物や、科学的なことに興味があったので、先生のことはさほど知らずに講座の申し込みをしたのが始まりでした。その頃すでに70歳代の後半にはなっておられた訳ですが、今と同じくお元気なものでした。この講座は午前中講義、午後は見学に出かけることが多くて、立ったままの電車、駅から暑い中を目的地まで歩くこともありましたが、初老の私たちよりもかえって元気なくらいでまずビックリでした。現在では80歳を越しておられるのに、この元気がまず凄いと思えます。

講座の中身は飛行機から、宇宙、ロケット、ヘリコプター。難しい話を素人にもその時は分かったように思わせる巧みな比喻、終いには生き物の動き、トンボや鳥や魚の力学、宇宙や地球の成り立ちに生物の進化の話と、とにかく学問の守備範囲の広さがすごい。おまけに「カレントトピックス」といってその時々々の時事問題や、色々なニュースから探してこられて解説をお聞きする時間があり、先生の興味の赴く範囲の広さにも感心します。

範囲の広さでいえば、先生のファン層の広さもすごい。前回の講座には20歳代の慶応の大学院生も参加していましたし、その前は航空工学の大学生もいたりで、アカデミーには珍しく20代の受講生がいました。彼ら曰く、以前からの「東先生」のファンだとのこと。ファン層は女性にも多いらしく、科学の講座は難しく女性が少ないのかと思いきや、10年来の女性受講者も多くて意外や意外といったところです。

これだけの知識、バイタリティーを維持するのは並大抵の努力では無理なのは凡人ならぬ先生でも同じらしく、睡眠時間を削って努力して来られた結果だと、ある時におっしゃっていました。学生に向かって曰く「君たちは天才か？そうでなかったら睡眠を削ってでも頑張るしかないだろう」と。そう言い渡された教え子は東京大学の学生だったわけですが、凡人たる私たちにも参考になりそうですね。

科学講座に関わらせていただいて

事務局 吉田 有香



私と科学講座の関わりは、運営がNPOに変わった07前期より終講となる12後期まで事務局窓口として担当させていただきました。さらにさかのぼると01前期からも何年間かにわたりときどき講座運営の補助をさせていただいておりました。私がアカデミーに参りましたのは01年ですので、ずっと何らかの形で科学講座と関係してきたことになりませんが、東先生の寛大なお心遣いにより、「仕事した〜！」というよりも「おもしろかった〜!!!」という思い出がたくさん残っています。

昔の会員制度にはコース専攻会員には修了単位のひとつに課題研究があり、各人がテーマを決めて調べたものを文章などにまとめて提出するのですが、科学では皆で協力して課題に取り組んでいったり、また、学期末にお茶会を開いたり、授業の無い期間も小グループで独自の研究をしたり、見学に出かけたりととても活発に活動されていたと思います。そのような研究や課外活動に先生はいつもにこやかにアドバイスをされたり、同行されたりしていて、意欲的に活動の幅が広まったり次の活動に繋がるきっかけをいつもいただいていたように感じます。

科学といえば野外学習へ頻繁に出かけましたが、東先生のご指示に合わせて野外学習の行程を組むのはなかなか難しかったのですがやりがいがありましたし、座学についても東先生のお力添えで様々な専門分野の講師の方々にご登壇賜り、科学という世界の広さと深さに感心しつつ、授業最後の質問の時間には東先生自らも質問をされる姿がとても印象的でした。

科学講座に関わらせていただいてもっとも強く感じたことは、世の中は不思議なものであふれているということです。何気なく過ごしていると気にも留めないですし、難しい計算や単位や化学式などはさっぱり分からなくて敬遠しがちですが、東先生は、ふとした疑問を拾い上げ、目に見えるように分かりやすいように教えてくださいました。素朴な好奇心が素直な感動を導いてくれること、さらに不思議なものへの興味を持たせたり、そういうものを見つける目を育ててくださったように思います。

最後に、東先生への深い感謝の気持ちを込めて、科学講座で東先生から教えていただいたこと、東先生と受講生の皆様とで長年にわたり積み上げてきたものを、アカデミーで変わらずに大切にしていきたいと思えます。

本の世界



『政治的思考』 杉田敦（岩波新書）

政治・社会講座・WSのコーディネーター、杉田敦先生の『政治的思考』が刊行されました。昨年4月刊行のブックレット『3.11の政治学』と同じく、話し言葉で書かれています。ここでは政治学者や思想家の名前などは一切出てきません。現在の日本において「政治的に考える」とはどういうことなのかを語りながら、有権者、政治の「当事者」である読者へと、著者自身の思いを伝えるメッセージのようにも読むことができます。これまでのアカデミーの講座内容と重なるトピックも取り上げられていて、興味深く拝読しました。

内容は、政治にみられる8つのテーマについて、これまで人々の間で採られてきた見方を問い直す形で、進んでいきます。本当に一部だけですので、各章の豊富な考察はぜひ手にとってお読みいただければと思います。

1章「決定—決めることが重要なのか」 政治的な決定を、誰が、何を、いつ、どのように決めるのか、また憲法改正の例などから見ていきます。世の中の趨勢として「早く決める」ことが重視されていますが、政治の存在意義は、過去と未来の間で踏みとどまり、自分たちの行動の影響を見ることにあります。**2章「代表—なぜ、何のためにあるのか」** では、多様な意見を代表すること、代表の代表、争点が複数ある場合の選択、選択後の時間の経過、争点隠しなど、代表民主制における「代表選び」の様々な疑問を取り上げています。代表とは「俳優として政治劇を行うことで、民意の形成を助ける存在」なのです。**3章「討議—政治に正しさはあるのか」** 政治的議論では生身の人間の議論が大事であり、政治に正しさを過度に導入しようとする、利害を横において話し合ったり、少数の人に判断をゆだねて人々の複数性が失われてしまいます。また、話し合いが開かれたものになるには、すぐに最終的決定を求めるような考え方や話し合いを極力切り離すことが大切であるとされています。

4章「権力—どこからやってくるのか」 権力は、それを持つ者と及ぼされる者との非対称な関係ではなく、権力の中にとどまっている者も暗黙に同意し、その正当性を支えていると言えます。権力への抵抗とは、「自分たちの中にある権力」を変えることであり、自分たちの生活様式を変えることを含んでいます。**5章「自由—権力をなくせばいいのか」** 答えはノー。自由は権力との対比で考えられてきましたが、自由を実現するための権力、自由を支えるための政治も考える必要があります。選挙の結果も自由の結果ですが、まずはそれが「自分の声であること」を認め、問題や課題を考えていくこと。また、代表として選んだ政府への抗議を「自己内の対話」と位置づけ、選挙以外にも民意の声を表明する回路を持つことが重要となります。このことは来期の政治・社会講座・WSの主題である、デモクラシーのさまざまな回路（選挙、熟議、直接投票、デモ）にも繋がるどころです。

6章「社会—国家でも市場でもないのか」 個人、社会契約、連帯、市民社会などを連想する「社会」は、実際には「国家」「市場」と密接な関係にあって簡単には分離できず、どちらが正しいとは言えません。著者は「社会」という言葉を「人間の複雑さ、不可解さを示す、絶望的なまでに曖昧なもの」と捉えることを提案しています。

7章「限界—政治が全面化してもよいのか」 私たちは皆、政治から逃れることができない。健全な政治のためには、政治の全面化や暴走に歯止めをかけるものを制度化しておく必要があります。教育、文化・科学・技術、違憲審査、メディア、そして官僚制もその一つです。**8章「距離」** は終章です。政治は人間社会に関わる複雑な作業であり、「おそれ」を持つべきもの。政治の複雑性や不透明性を絶えず意識し、自ら当事者として関与しながらも、「政治に距離をとる」という向き合い方、政治的思考をどう身に付けるかが、今、問われています。

『編集後記』 梅の花 それとも見えず 久方の 天霧る雪の なべて降れば

厳寒の中にも春の兆しが見え始める季節になりました。アカデミー開設時からのコーディネーターであられた東先生が引退なさいます。NPO理事長をも務められアカデミーの今日を築かれた功労者です。心からの感謝を捧げます。

編集責任者：折居 晃一、田辺 初子、高橋 富夫、原 宏、西山 拓